

原 著

川田貞治郎の「教育的治療学」の体系と内容の変化
—藤倉学園創設期から昭和戦中期を中心として—

高野 聡子

川田貞治郎（1879-1959）の「教育的治療学」は、精神薄弱児施設、藤倉学園（大正8〔1919〕年設立）において考案された教育と保護の理論と方法である。本研究では、藤倉学園創設期と入所者数が最もピークを迎えた昭和戦中期とに時期を分け、教育的治療学の体系と内容の変化について検討した。その結果、教育的治療学の内容は、藤倉学園の入所者の実態の変化の影響を受け、藤倉学園創設期と昭和戦中期で変化し、教育的治療学の対象である精神薄弱児（者）の区分は、藤倉学園の入所者の実態の変化と、教育的治療学の内容と方法の増加を受けて変化していることが明らかになった。さらに川田の教育的治療学は、藤倉学園における全ての処遇内容を教育的治療学の構成内容としており、日常生活の訓練や保護が中心となる精神薄弱児の処遇についても、教育効果を期待し、教育的治療学の構成内容として位置づけていたことも明らかになった。

キー・ワード：川田貞治郎、教育的治療学、藤倉学園、精神薄弱児施設、精神薄弱

I. 問題と目的

1. はじめに

大正8（1919）年6月7日、国内4番目の精神薄弱児入所施設として、東京府伊豆大島に藤倉学園（現在の大島藤倉学園）が設立された。初代学園長ならびに常任理事は川田貞治郎（1879-1959）が務め、彼は施設運営に従事するとともに、精神薄弱児の教育と保護の理論ならびに方法を「教育的治療学」と命名し、形成と体系化に着手していった。

川田は教育的治療学の形成に際して、藤倉学園の入所児・者を対象に実践を重ねたため、形成と体系化には長時間を要した。そのため教育的治療学は体系化の途上にあり（川田〔1958〕19; 西谷〔1986〕97; 清水〔1978a〕38ほか¹⁾）、

結局のところ教育的治療学は未完のままである。だが、川田の教育的治療学は戦前の精神薄弱児入所施設で実践された教育と保護の理論と方法の一つであるがゆえに、精神薄弱児施設での教育と保護の方法を明らかにするため研究の対象とされてきた。

教育的治療学の形成と体系化への着手は藤倉学園設立後であるが、教育的治療学の構想は、すでに藤倉学園設立以前から、川田自身によって教育的治療学の身体的機能訓練の一つである「心練」の考案を中心になされていた²⁾。この教育的治療学の構想時期を対象にした研究には、小田原家庭学園（不良少年のための保護施設）において、川田が不良少年やその中の低能児を対象に心練を実施していたことを明らかにした高野（2006）、川田が設立した私立日本心育園（低能児教育施設）で実施した心練の内容と方法を分析した津曲（1988）と高野（2008）、

目白大学人間学部子ども学科

川田が滞米時代に教育的治療学を構想していたことを明らかにした津曲（1987）と高野（2005）があり、藤倉学園設立以前は教育的治療学の構想時期にあったといえる。

一方、藤倉学園設立後の教育的治療学に関する研究には、西谷（1986）と清水（1976ほか^{31）}の藤倉学園設立以前も含めた通史的な教育的治療学研究があるが、通史的であるため、藤倉学園設立後の教育的治療学については一部分となっている。また高野ら（2004）は藤倉学園設立以後に研究対象時期を設定し、藤倉学園で実施された教育的治療学の対象、内容と方法を実践記録から分析し、高野（2009）は藤倉学園創設期の学園の施設運営や処遇の実態から教育的治療学の内容や方法を明らかにしたが、いずれも教育的治療学の全体像については残された課題になっているといえる。

そして、藤倉学園設立以後の教育的治療学の全体像を明らかにするべく教育的治療学の体系については、菊池（1977）と西谷（1981）が体系を図式化する方法によって究明しようとした程度といえる。菊池（1977）と西谷（1981）の研究では、史料収集の制約から川田の後継者からの聞き取りに頼らざる得ない部分があり、藤倉学園で実際に川田がどのような精神薄弱児を対象として教育的治療学を実施し、教育的治療学の体系が藤倉学園の処遇内容の変化とともに変化したのか、そしてそれにはいかなる背景があったのかについては、明らかになっていないと思われる。

本研究では、川田が発表した教育的治療学に関する論文、藤倉学園の事業報告書、教育的治療学の実践記録（『心練ノート』）を史料として用いることによって、教育的治療学の体系、内容、目的、対象とそれらの変化を明らかにすることとする。

川田の発表論文は、藤倉学園で実施し検討を重ねた教育的治療学の発表であり、未完部分がある教育的治療学のなかでも完成された教育的治療学の内容と方法を示す史料である。また、藤倉学園の事業報告書は学園の入所児・者の年

齢、障害の程度、学園での24時間の教育と保護の処遇内容と方法が年度ごとに報告されており、藤倉学園の実態とともに教育的治療学の内容や目的、対象が確認できる史料である。実践記録は、川田の発表論文と比べれば、試行段階にある教育的治療学の記録ではあるが、発表論文や事業報告書では記述されていない教育的治療学の内容と方法が明らかになる史料といえる。

研究対象の時期は、教育的治療学が藤倉学園設立以後に形成・体系化されていたことから、本研究では藤倉学園以後に設定し、教育的治療学の体系の変化を明らかにするため、次の第二期に時期を分ける。まず、第一期は、藤倉学園の創設期である藤倉学園設立から大正15（1926）年の藤倉学園の新園舎の設立までとする^{41）}。第二期は、昭和13（1938）年から昭和19年（1944）年8月15日に山梨県北巨摩郡清里村の清泉寮^{51）}へ疎開^{61）}する前までの昭和戦中期に設定する。

第二期に昭和戦中期を設定する理由は、昭和13（1938）年に入所者数が70名を超え、この時期はそれまでにない入所者数のピークをむかえるためである。またこの時期は、戦中期であったにもかかわらず「教育訓練」が理想的に実施され、農作物等の生産によって生活は自給自足の域に達し、戦争も感じぬほど生活は豊かであったと戦後の事業報告書で報告されており（藤倉学園昭和式拾参年度事業報告〔1948〕204）、それまでで最も盛んに教育的治療学が実施されたと考えられるからである。

さらに本研究では、川田の教育的治療学が同時代の精神薄弱児施設の教育と保護の理論と方法として、独自性を有するのか、あるいは一般的であったのかについても分析する。分析の方法は他施設との比較を用いるが、比較対象施設には同時代に藤倉学園と同じく東京府下にあった滝乃川学園^{71）}（明治24〔1891〕年創設、明治30〔1897〕年改称）を設定し、分析観点は教育的治療学が精神薄弱児施設での教育と保護の理論と方法であったことから、滝乃川学園での教育と保護の内容や方法とする。滝乃川学園を比

較対象とする理由は、滝乃川学園が藤倉学園と同じく東京府下にあっただけでなく、国内最初の精神薄弱児施設として、施設長の石井亮一（1867-1937）を中心として当時の精神薄弱児施設の主導的な立場にあったからである。

なお、本研究は歴史研究であり、本文中には精神薄弱、白痴、痴愚、軽愚などを歴史的用語として使用する。

2. 教育的治療学の体系の変化と目的

教育的治療学の構成内容は、藤倉学園創設期においては、①道徳訓練、②宗教的訓練、③衛生、④治療教育（学課および心練）、⑤遊戯、⑥作業、⑦保護教育の7つであったが（Fig. 1）、昭和戦中期においては、①道徳訓練、②宗教的訓練、③衛生、④治療教育（教育的治療とも言われ、その内容は学課、力の教育、心練）、⑤遊戯、⑥作業、⑦職業、⑧保護教育の8つにな

る（Fig. 2）。これら創設期と昭和戦中期の教育的治療学を比べれば、昭和戦中期には次の2点の変化が見られる。まず、治療教育の内容が変化しており、もう一つには職業が構成内容として新たに加わっているのである。それではこのような変化の理由はどこにあるのであろうか。

最初に、治療教育の内容の変化についてみてみよう。治療教育の内容は、創設期には大きく分けて学課および心練の2つであったが、昭和戦中期になると学課、力の教育、心練の3つになる（治療教育の内容は4. (3) で後述）。昭和戦中期においては、物を運ぶ訓練によって身体的機能を高める力の教育が治療教育の内容に加わったのであるが、これは川田が教育的治療学の対象設定を変化させたからである。というのは、彼は昭和戦中期になると、教育的治療学を実施するためにそれまで3つに集団を編成して

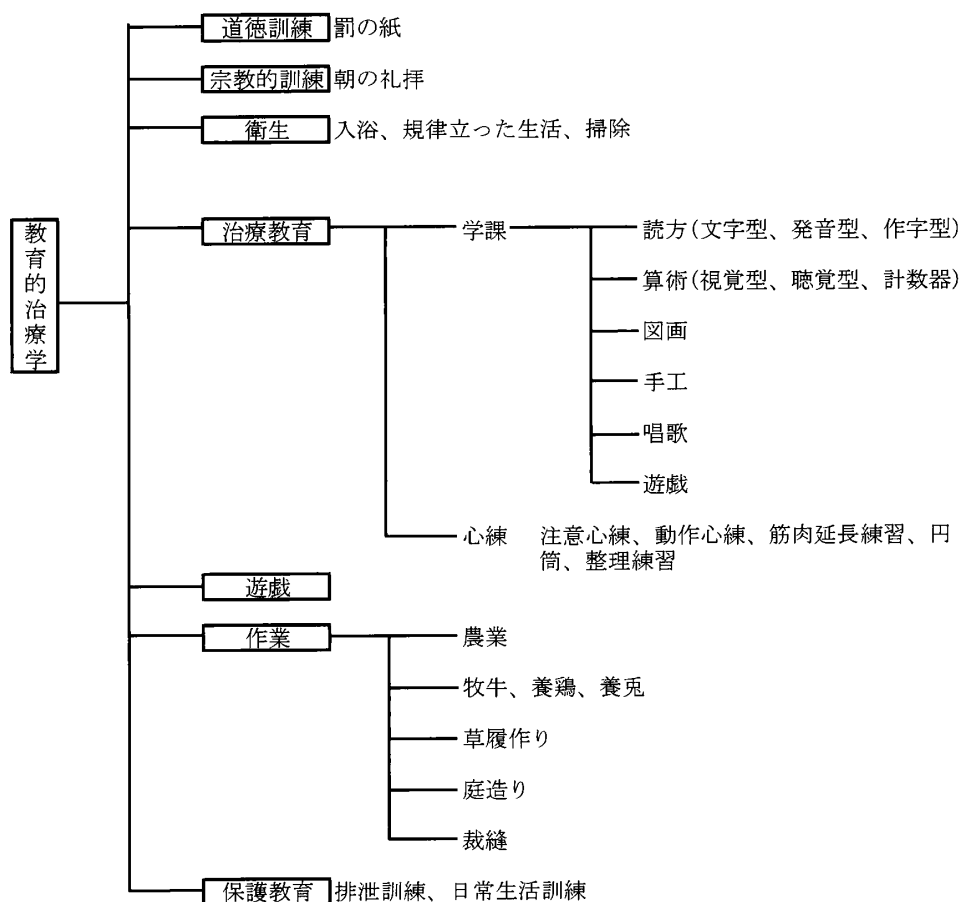


Fig. 1 教育的治療学体系（藤倉学園創設期）

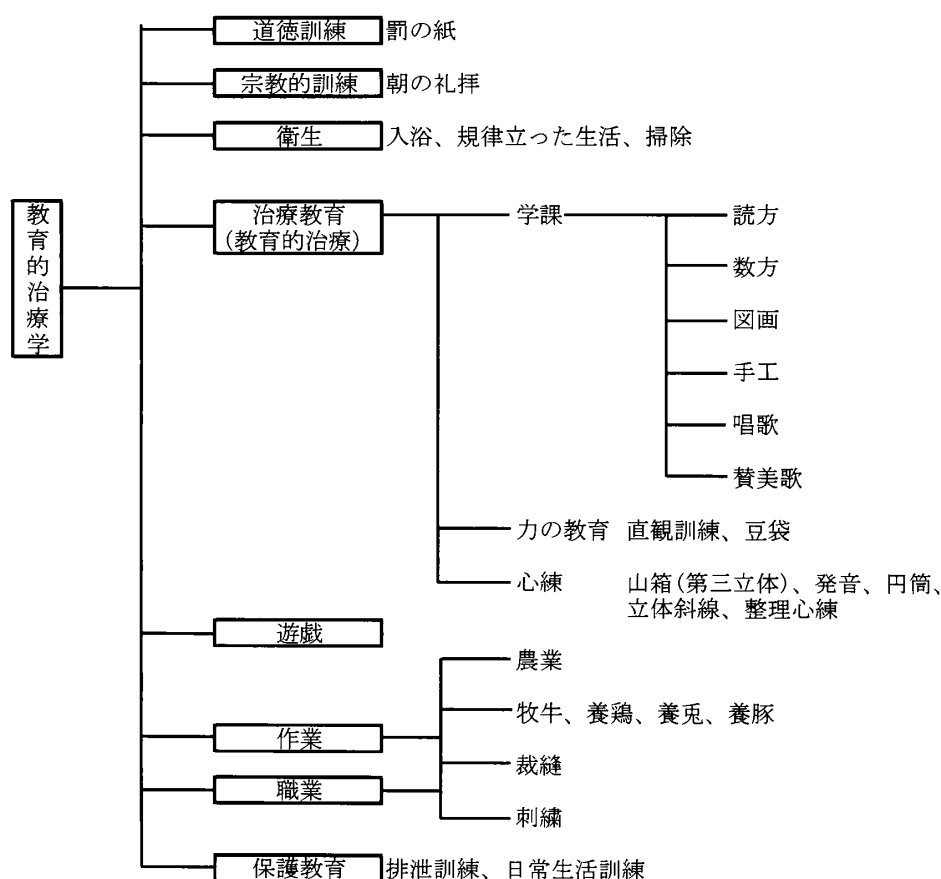


Fig. 2 教育的治療学体系（昭和戦中期）

いた藤倉学園の入所者を、さらに分化し4～5の集団に編成し直す（集団編成については3.で後述）。

とくに集団編成の変化は白痴に見られた。創設期において川田は、白痴を「治療教育の出来ぬ者」とし、彼らには教育的治療学の中でも単に排泄訓練などの日常生活訓練を中心とした保護教育を実施していた。だが、川田は昭和戦中期になると、治療教育の内容に力の教育を加え、それを「絶対的な保護を必要とする」者を除いた白痴に対しても実施するようになる。すなわち治療教育の効果が、部分的な例外はあったものの白痴に対しても予測できると考えるようになったのである。

このようにそれまで日常生活訓練のみを白痴に対して実施していたにもかかわらず、治療教育の効果を彼らに対しても予測した背景には、川田の精神薄弱児（者）に対する彼の理念があったと考えられる。彼は、「劣能^{おとつた}人」と「普

通の人」との区別は、単に「ただ人」が引いた線引きによって語られ、その線引きによって「劣能^{おとつた}人」に教育を提供しなければ、彼らは退歩していくだけであるとし、これは結婚の日（大正3〔1914〕年12月23日）の『めあて』（大正十年度年報第二巻, p.序⁸⁾）で誓約されたように、彼の最も根本的な理念に属していた。彼は精神薄弱児（者）の人間としての尊重を、彼らに対する教育の必要性に求めたのである。そのため彼は、精神薄弱児教育において「教育不能」という言葉を「抹殺したい」と激しい言葉で述べるほど（藤倉学園昭和十四年度事業報告, p.116）、全ての精神薄弱児に教育効果が期待できる教育内容と方法を探求してきたのであった。

川田が尊重した人間としての精神薄弱児（者）は、滝乃川学園の石井にも見られた。彼は、「色々な訳」から「白痴教育」の必要性を述べれば限りがないと指摘するものの、彼が白痴教

育に従事する理由を、「国家」における白痴教育の利益の有無、ならびに「教育の結果」とは別に、「親が子を愛し、子が親を慕う」ような「情の上」からであると説明したのである（石井〔1909〕569-570）。

だが、石井は教育効果の予測に対してはより現実的であった。なぜなら彼は、精神薄弱児教育は「全く無効」ではなく、必ずある程度の発達は期待できるとするものの、彼の精神薄弱児教育の効果の予測から「極めて小数なる極度の白痴」を除いていたのである（石井ら〔1910-1925〕178）。すなわち石井は、川田のように全ての精神薄弱児に対して、精神薄弱児教育の教育効果を期待しなかったのである。とは言うものの既述のように石井は精神薄弱児教育の必要性については川田と同じく否定していたわけではなく、両者の教育効果の予測における違いは、川田の彼自身が考案し、体系化しつつあった教育的治療学に対する高い自負が理由の一つにあったといえよう。

川田の教育的治療学に対する高い自負は、次のような事業報告の記述に見られる。彼は、「どれほど「智識」の程度が低い者であっても、教育方法によっては教育が不可能であることはなく」、そのため「教育不能者としてきた従来の低能児教育は実に頼りない」と述べており（藤倉学園昭和十四年度事業報告, p.116）、さらに藤倉学園において精神薄弱児教育を20年あまり実施してきたことについて、「精神薄弱児の教育が教育学の基本研究としてどれだけ重大性を持っているか、またいかに必要であるかを明白に語り、社会においていかに有意義な存在であるかを認識させるに至った」とも述べている（藤倉学園昭和十四年度事業報告, p.114）。

第二の教育的治療学の体系の変化は、昭和戦中期になると新たに職業が構成内容に加えられたことである。職業は、年長者を対象とした施設内の仕事であったため、身体的訓練を主たる目的とした作業とは区別された。

職業が昭和戦中期になって設けられた理由には、藤倉学園の施設運営方針の変化があげられ

る。昭和戦中期になると、創設期には家族等の保護環境下での生活であった退所条件が、昭和戦中期になると農業に従事でき、なおかつ家族等の財産によって将来の生活が保障できる者、という条件に限定されるようになる。

創設期の藤倉学園では、精神薄弱者を「生まれざる様」な「予防策」として、彼らの結婚禁止と、施設内での「永久的」な保護の必要性が指摘されていたが（藤倉学園大正九年度年報第一巻, p.10）、川田は家族等の保護環境下での生活を前提とした教育と保護を実施し退所を実現しようとしていた。また、その一方で、創設期には、精神薄弱者の終生保護を実現するため、大島藤倉学園を施設内で就労させる施設内保護に特化した施設とし、他の敷地に年少者のための施設創設を構想していた（藤倉学園大正十一/十二年度年報, p.208）。だが、年長者のための施設は、昭和戦中期になっても創設されなかったから、施設機能を変更せずにはいられず、川田の教育的治療学の体系においてもそれへの対処として職業が追加されることになったのである。

終生保護機能の構想は、大正期の滝乃川学園においても見られた。この頃の石井は、海外における精神薄弱児施設の社会的意義が、教育の失敗を理由に終生保護機能へと転換していることに着目し（石井〔1940〕286-287）、ニュージャージー州（施設名は明記せず）のコロニーの例をあげ、精神薄弱者の増加を防ぐため滝乃川学園における「コロニー」構想について触れるようになる（石井〔1923〕297-298）。

そもそも滝乃川学園では、明治39（1906）年から「懇切なる保護者」の下で「独立自営」を目指すため実業部を設けていたことから（滝乃川学園〔1910〕148; 津曲ら〔1974〕34）、明治末期から滝乃川学園においても保護環境下の整備を前提とした退所は想定されていたといえよう。だが、石井は軽度の精神薄弱者に対してのみ「独立自営」を認めていたため（石井ら〔1910-1925〕178）、軽度以外の精神薄弱児（者）は施設内保護の対象となっていたと考えられる。

以上のように昭和戦中期になると教育的治療学の体系は、白痴に対する治療教育の成果が予測可能になったため、治療教育の内容に白痴を対象に含めた力の教育が加えられ、施設内保護機能への転換によって施設内での職業的自立を目指した職業が新たな構成内容として加えられたのである。しかしながら教育的治療学の体系が、教育効果の予測変化ならびに施設機能論の転換によって変化しようとも、川田の精神薄弱児（者）の人間としての尊重に基づいた精神薄弱児教育の必要性は変わらなかったため、全ての精神薄弱児（者）の変化と改善こそが教育的治療学の目的であったと考えられる。

3. 教育的治療学の対象設定と集団編成の変化

川田は、教育的治療学の対象をどのような精神薄弱児・者に設定していたのであろうか。彼は、創設期から精神薄弱児・者を教育的治療学の対象としていたものであり、表向きの精神薄弱児・者は、教育対象から除外しようとしていた。例えば、藤倉学園では教育的治療学の対象としての適格性を判断するため、入所者には入所後6箇月の仮入所期間を設け、この仮入所期間において感化院や精神病院等への入所が適切と判断されれば、入所者は藤倉学園から他機関に移されていた（藤倉学園大正十一/十二年度年報, p.185；藤倉学園大正十五年一月編, pp.29-30）。だが、学園の対象としての適格性を有した精神薄弱児・者ではあっても、その範囲は広がった。とりわけ川田が対象とした精神薄弱児には、精神薄弱を合わせ持つ不良少年も含まれており、事実、藤倉学園は創設期から少年法の保護団体（少年法第4条第1項第5号保護団体）となり⁹⁾（財団法人日本少年保護協会東京支部, p.184）、不良少年であっても精神薄弱を合わせ持つっていると川田によって判断されれば、藤倉学園への入所はもちろんのこと教育的治療学の対象とされたのであった。

そのような精神薄弱を合わせ持つ不良少年を川田は、「危険性精神薄弱児」と呼び、彼らの特性は「モロン」（軽愚）程度の精神薄弱に加

え「感情性の異常」を有し、犯罪を起こすことと説明した（藤倉学園大正十三年度年報第五巻, p.8）。川田は、彼らは罪を犯すがゆえに社会の害悪になるという認識はもちろんのこと、彼らに対する「治療教育」の内容と方法が探究されていない現状から、彼らを藤倉学園に収容し、彼らのための「治療教育」を考案しようとしたのであった。

石井の教育対象もまた、滝乃川学園の入所対象者が精神薄弱児に想定されていたが（東京府社会事業会 [1923] 312）、精神薄弱を合わせ持つ不良少年に対する認識も見られた。石井の場合、精神薄弱を合わせ持つ不良少年を「道徳的痴愚（生来性常住的不良児）」と呼称し、彼らは比較的「智能」が高い精神薄弱児で、「懲罰」を与えても矯正の効果が見ないと説明した（石井ら [1910-1925] 160-162）。

さらに石井は道徳的痴愚に対しては、精神薄弱児施設での対応というよりも、普通学校での早期発見とその後の対応の必要性を考える。彼の不良少年の原因論は環境にあったから、彼は、道徳的痴愚は幼少期の普通学校での知能検査の実施によって発見されるとともに、彼らを取り巻く環境への注意を指摘した（石井 [1933] 452-453）。

したがって精神薄弱を合わせ持つ不良少年に対する立場は、川田は彼らを教育対象に含めたものの、石井においては彼らの早期発見と対応に重点を置く指摘する程度であった。ただし川田は、不良少年の中で98%が危険性精神薄弱児（2%は「普通児」）であるという高い出現率を指摘しながらも、実際のところ彼らの藤倉学園への入所数は少なく（財団法人藤倉学園, p.146）、彼らに対する教育は着手されたばかりであったといえる。

以上のように対象としての精神薄弱児には、危険性精神薄弱児が含まれるなど、精神薄弱児・者の精神薄弱の状態と程度は幅広かった。そのため教育的治療学を実施するに際しては3～4の集団編成を形成することになるとともに、その集団編成の集団数と編成基準は、創設

期と昭和戦中期において変更される。そこで次に創設期の集団編成から検討していきたい。

創設期の集団編成は、次のような3つの集団に編成されていた。それはTable 1のように、①「治療教育をされし者」、②「治療教育の出来ぬ者」、③「年齢を超過したる者」であった（藤倉学園大正十年度年報第二巻, p.8; 清水[1978a] 37）。

第一の集団である「治療教育をされし者」は、年少の痴愚・軽愚児であった。川田は、治療教育の主たる対象を痴愚・軽愚とし（藤倉学園大正九年度年報第一巻, pp.8-9）、6～12歳の年少を治療教育の効果が期待できる理想的な年齢としていた（藤倉学園大正十一/十二年度年報, pp.187-188）。この精神薄弱の程度と年齢の設定は、川田の精神薄弱児に対する治療教育の効果の予測が根拠とされ、彼らには主として治療教育（学課および心練）と作業が実施されていた。

第二の「治療教育の出来ぬ者」は白痴に設定されていた。というのは、川田は白痴に対しては、治療教育ではなく排泄訓練等による日常生活訓練を中心とした保護教育の対象としていた

からである（川田[1926] 60-61）。だが、創設期より白痴の一部に対して「治療教育をされし者」に実施していた心練を実施しており、このことは昭和戦中期の集団編成の変更に影響を与えることになる。

第三の「年齢を超過したる者」は、満18歳以上の精神薄弱者であった。この年齢基準は川田の治療教育の実践経験を根拠としており、彼は治療教育の効果と可能性は満18歳を超えると減少すると考えたのである（藤倉学園大正十一/十二年度年報, pp.188-189）。満18歳以降の精神薄弱者に対しては、治療教育ではなく作業が主として実施された。

このように創設期の教育的治療学では、①年長者は作業の主たる対象として、②年少痴愚・軽愚は治療教育の主たる対象として、③白痴は保護教育の主たる対象として設定されていたのである。

しかし昭和10（1935）年になると、川田は彼の「臨床的経験」を根拠に「精神薄弱の新分類」を発表する。その新分類はTable 2のように、①「絶対的保護」を要する「第一類型」、②教室での教育が試行される「第二類型」、③文字

Table 1 教育的治療学の構成要素とその対象（藤倉学園創設期）

教育的治療学の構成要素/ 対象者（精神薄弱の程度）		治療教育をされし者 （年少痴愚・軽愚）	治療教育の出来ぬ者 （白痴）	年齢を超過したる者 （年長精神薄弱者）
掃除		全ての精神薄弱者が実施		
道徳訓練				
宗教的訓練				
衛生				
治療教育	学課	○		
	心練	○	△（実施する者もいた）	
遊戯		○	△（就寝前）	△（就寝前）
作業		△（午後のみ）		○
保護教育			○	

Table 2 教育的治療学における精神薄弱の新分類

類型	状態
第一類型	「絶対的保護」を要する者。保母が一寸も目を離さず付き添うことが必要である。
	a 自己愛の発達時期
	b 対象発見期
	c 現象に順応する時期
第二類型	教室にいられるが、外界に対する対象的観念に欠ける。
第三類型	教育的可能性が大部進み、文字教育の段階にある。
第四類型	職業教育の者(教室にいなくても正道に進むことが出来る)。
第五類型	年長で、「性格的欠陥者」であるが常識的知識を有する者。

出典：川田(1933b) 23-25；(1935c) 15.

Table 3 教育的治療学の構成内容とその対象（昭和戦中期）

昭和12年		教室出席者		保護を加ふる者	実課のみの者	家事手伝い	
昭和13年		教室の時機にある者		保護教養さる可き者	既に教室の必要な者		
昭和14年		教室の時期にある者		保護教養さる可き者	職業的教育期にある者	教室の必要な者	
対象者(精神薄弱の程度)		軽愚・痴愚(中度・軽度)	痴愚(重度)・白痴(中度・軽度)	重度の白痴	年長白痴(中度・軽度)、痴愚・軽愚		
掃除		全ての精神薄弱者					
道徳訓練							
宗教的訓練							
衛生							
遊戯		○	○	△(就寝前)	△(就寝前)	△(就寝前)	
治療教育	学課	○					
	力の教育						○
	心練	○					
保護教育				○			
作業		△(午後のみ)	△(午後のみ)				
職業							
					○	○	

出典：藤倉学園昭和十二年度事業報告, p16 藤倉学園昭和十三年度事業報告, p71 藤倉学園昭和十四年度事業報告, 財団法人藤倉学園(1941),p138p115

教育の可能性を想定した「第三類型」、④教育内容が職業教育のみとされた「第四類型」、⑤年長者の「第五類型」であった（川田 [1933b] 23-25; 同 [1935c] 15）。この新分類を創設期の3つの集団編成と比べれば、治療教育の対象設定が第二類型と第三類型に、年長者が第四類型と第五類型に細分化されている。

治療教育の対象者と年長者を細分化した集団編成は、入所者数が増加し始める昭和12（1937）年以降の昭和戦中期にも見られ、その集団編成はTable 3のように昭和12（1937）年を皮切りに、昭和13（1938）年に1回目の変更が、昭和14（1939）年には2回目の変更がなされる。この昭和14（1939）年の集団編成は、昭和16（1941）

年の疎開前まで続くため、昭和戦中期の最終的な集団編成といえる。

昭和戦中期の集団編成をまとめれば、①年少白痴（中度・軽度）・痴愚・軽愚は治療教育の対象に、②重度の白痴は保護教育の対象に、③年長者は施設内就労の対象に設定されたことになる。これを創設期の集団編成と比べれば、年長者は一人で農業等に従事できる者（「職業的教育期になる者」と、付添が必要な者「教室の必要ない者」に分けられ、治療教育の対象者に、年少白痴（中度・軽度）が含まれたことがわかる。

このような教育的治療学の集団編成の細分化と変化はいかなる理由から生じたのであろうか。第一に、年長者が施設内の仕事に従事するようになるが、これは教育的治療学体系の変化で見たように、施設論の変化の影響を受けたと考えられる。なぜなら昭和戦中期になると、藤倉学園の入所者の退所条件が限定され、施設内保護へと施設論が変化するからである。すなわち、川田個人が想定していた対象論の変化の影響を受けたのではなく、藤倉学園に生じた施設論の変化の影響を受けたのである。

第二に治療教育の対象の変化が起きているが、これは教育的治療学の方法の増加が理由として考えられる。藤倉学園内には「教育的治療学研究室」が設けられ、そこでは川田の教育的治療学を研究対象として、精神薄弱児教育の方法としての探究が行われる。さらに、昭和戦中期には創設期に比べ方法が格段と増加したことがわかる。川田は昭和期になると「日本心理学会大会」¹⁰⁾、「日本神経学会」¹¹⁾等の学会及び『児童研究』¹²⁾、『教育心理研究』¹³⁾、『応用心理研究』¹⁴⁾など心理学、児童学の雑誌で教育的治療学の内容と方法を発表しているのである。したがって、川田自身が昭和戦中期になると、それまで以上に教育的治療学の方法を考案し、実践を重ねた結果、治療教育の内容の増加という変化が起きたのである。

一方、滝乃川学園においても教育に際しては集団が編成され、その集団編成には明治末期と

昭和期とで変化が見られた。まず明治末期（明治43〔1910〕年頃）の集団編成は、①予備科（幼稚園程度）、②小学部、③中学部、④実業部（作業に従事する）の4つであった（滝乃川学園〔1910〕145-148）。これは生活年齢を基準にした集団編成で、明治末期の滝乃川学園の集団編成の主たる基準は生活年齢にあった。

だが、滝乃川学園では、精神年齢を第一の基準とし、それに生活年齢に近い者を集めた6つの集団編成を形成するようになる（峰島〔1979〕97-98）。それは昭和10（1935）年頃に、①男子部1組（平均MA 9歳）、②男子部2組（平均MA 8歳）、③女子部（平均MA 6歳）、④幼稚部1組（平均MA 7歳）、⑤2組（平均MA 5歳）、⑥その他の6つに形成されていた（財団法人滝乃川学園〔1935〕369）。したがって、昭和期の滝乃川学園では精神薄弱の程度と生活年齢を基準とし、藤倉学園では川田が形成した教育的治療学の内容と方法を前提とし、入所者を分けていたのであり、川田が教育的治療学を中心として入所者を処遇していたことが説明できる。

4. 教育的治療学の構成内容・方法とその意義

本項では、教育的治療学が具体的にどのような構成内容と方法であったのかについて検討していく。

(1) 全ての精神薄弱児・者を対象とした「宗教的訓練」・「衛生（掃除）」・「遊戯」

藤倉学園の入所者全員を対象にして実施された構成内容は、「宗教的訓練」、「衛生（掃除）」、「遊戯」の3つであった。まず「宗教的訓練」は、朝の礼拝を通して実施された。川田は、宗教は教育を受けるために不可欠な学びであると考え、入所者の品性を陶冶することを目的とし実施した（藤倉学園大正十一/十二年度年報, pp.195-196）。

一方、滝乃川学園の礼拝は、入所者の随意ではあったが、毎朝夕実施され、日曜日には牧師による説教が行われた（滝乃川学園〔1910〕134）。滝乃川学園がこの礼拝において目的にしたことは、礼拝を通して「理義」を学ぶことは

難しくても、入所者が静寂な場所に集まることによって「謹厳」な態度を学習することであった。以上から藤倉学園ならびに滝乃川学園では、礼拝を通して品性や態度を養おうとしていたことがわかる。

次に「衛生」は、体を動かす習慣と規律が整えられた生活の中で実施され、入所時よりも良い健康状態の形成を目指した（藤倉学園大正十五年一月編, p.23, pp.34-35）。とりわけ、清潔さから心地よさを学ぶため、「実物教授」という観点が重視され、入浴は週三回実施され、職員がよく体を洗ってやり、清潔な肌着を身につけさせるようにした。また掃除は、入所者全員が朝夕2回、部屋の拭き掃除、庭掃除等などを実際に掃除をすることによって学んだ（藤倉学園大正十五年一月編, p.23）。

滝乃川学園においても入浴は、藤倉学園より少ないものの週二回あり（藤倉学園の場合は地下水が豊富であった）、職員が入所者を入浴させていた。しかし掃除については入所者には難しい作業として考えられ、滝乃川学園では職員が実施していた（滝乃川学園 [1910] 132）。このような相違は、川田が、藤倉学園が提供する日常生活の全ての内容を教育的治療学の内容として実施しようとしていたことを表している。

そして「遊戯」は、午前中の学課の時間と夕食後の自由時間において実施された。午前中の学課で実施された遊戯の対象は、年少者であったが、夕食後の自由時間の遊戯は全ての入所者が対象とされ、その内容は読書、五目並べ、ピンポン、トランプ、散歩などで楽しさを重視していた（財団法人藤倉学園 [1941] 141）。とりわけ川田は、「愉快であるという心で暮らす」ことが精神薄弱児の心身に影響を及ぼすと考えており（藤倉学園大正十五年一月編, p.35）、遊戯においては楽しさが重視されたと考えられる。

滝乃川学園においても、遊戯は勝敗を決めるような内容ではなく、心身の啓発を促すことを目的として行われ（滝乃川学園 [1910] 144）、藤倉学園と滝乃川学園のいずれにおいても遊戯

は、精神薄弱児・者の発育を促すために実施された内容であったといえる。

以上のように全ての精神薄弱児・者に対して実施された「宗教的訓練」、「衛生」、「遊戯」は藤倉学園だけでなく滝乃川学園でも実施されていた。しかし、「衛生」を学ぶための掃除は、滝乃川学園では職員が行っていたため、川田の教育的治療学では、精神薄弱児施設で営まれる生活全てを教育内容として捉えていたといえる。

（2）低能児を対象とした「道徳訓練」

道徳訓練は、主たる対象を低能児に想定し「罰の紙」という用紙を用いた方法で行われ、人間としての自己形成を目的としていた。なぜなら川田は、低能児そのものは「不良行為」をするような素質を持ってはいないものの、「家庭」、「環境」等の影響によって不良行為をすると考えていたからである（藤倉学園大正十一/十二度年報, pp.189-199）。

「罰の紙」には、「にははき」、「ぞうきんかけ」、「みづくみ」、「ごはん」等、入所者が1日に行う行動内容が書かれていた。入所者は「罰の紙」を携帯し、紙に書かれた内容に「それはぬこと」があれば、「不成績」として紙に穴がかけられ（藤倉学園大正十一/十二度年報, pp.190-200）、その穴によって入所者が責任を感じ、良き品性を建設することを意図していた（藤倉学園大正十一/十二度年報, p.200）。この方法は、川田が滞在したヴァインランド施設では“O. K. Slips”と呼ばれ、実施されており（Johnstone [29th AR 1917] 29-30）、川田は「罰の紙」と呼称し、藤倉学園の道徳的訓練として導入したのであった。

滝乃川学園では、藤倉学園で実施されたような具体的な道徳訓練は見られないものの、石井は「人の品性」は環境の影響を受けるがゆえに環境整備の重要性を指摘している（石井 [1926～1933] 308-309）。したがって、道徳を学ぶという点については、川田も石井もその重要性を認識していたが、川田の場合は教育的治療学の内容として具体化していた。

(3)「治療教育」(教育的治療)の内容と方法

1)「直観訓練」の内容と方法

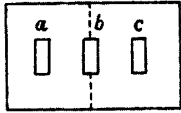
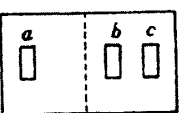
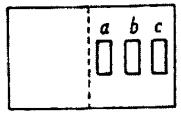
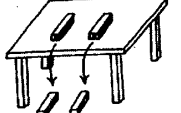
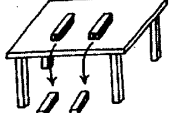
「治療教育」は年少者を対象とし実施され、川田が考案した教育的治療学の教具が使用され、昭和期になると直感訓練(第一教具)、数概念、第八教具(思考の形成)、文字教育(片仮名)等が学会等で発表されているが、直観訓練の教具は、「第一教具」(川田 [1931a] 426: 同 [1931b] 4)あるいは「直観教具」と呼ばれ(川田 [1939a] 198)、第一教具の材料は木片で、形は長方形、数は3つであった。大きさは昭和6(1931)年に $4 \times 4 \times 7.5\text{cm}$ であったが、昭和14(1939)年に $4 \times 4 \times 8\text{cm}$ となる。

川田によれば、この第一教具はフレーベルの恩物を参考にしたものの、精神薄弱児が「手指運動」の発達が不十分であるために、精神薄弱児が握ることができるような大きさで、単純な形であること、また適当な筋肉運動ができるような質量を配慮し形成された(川田 [1939a] 198)。

川田が参考にしたフレーベルの恩物の種類は明記されていないが、教具の形から「第四恩物」¹⁵⁾と考えられる。ただし第四恩物の大きさは $3 \times 1.5 \times 6\text{cm}$ 、数は8個で(玉成高等保育学校幼児保育研究会(編) [1974] 121)、川田の第一教具は第四恩物より大きく、数が少ない。教具が3つである理由は、3こそが2の次に多数であり、それは数概念の出発点であると説明されており(川田 [1939a] 198)、彼の数概念に関する理論が関係しているといえる。

直観訓練の目的は、精神薄弱児の萎縮した精神を刺激し、「自動性」を出すことにあった(川田 [1931b] 4)。その方法は、①自由訓練、②模倣訓練、③創造訓練、④注意及び記憶訓練の4段階で進められ(Table 4)、この直観訓練は教育的治療学における教育の出発点とされ、とりわけ自由訓練は、「精神発育の最も低級な段階に止まっている所の白痴」に対して実施可能であると考えられていた(川田 [1939a] 198-199)。そのためこの直観訓練は、教育的治療学

Table 4 直観訓練の目的と方法

教育の段階・名称		目的	方法	図
①	自由訓練	教具という一定対象に向かって意識活動を統制させる。	子どもを「治療教室」に入れ、指示は何も与えず第一教具を与える。子どもは自由に第一教具で遊ぶ。	
②	模倣訓練	外部からの力に順応すること慣れる。学習の第一歩である模倣の習性を獲得する。	教育者が第一教具を様々な形に置き、子どもはそれを模倣する。	
③	創造訓練	子どもはこれまで指示によって動いていたが、初めて自己活動に入り、教具に対して法則ある「能動性」を発揮させる。	子どもに第一教具を与え、自由にさせる。	
④ 注意及び記憶訓練	注意訓練	子どもに第一教具を指示通り置かせ、位置に対する注意力を訓練する。	子どもに第一教具を指示通りに置かせる。課題は「並列法」(右図I)、「斜列法」(右図II)、「山型法」(右図III)の3つ。なおここで初めて机を使用する。	
	記憶訓練 (記述なし)		子どもに第一教具2個を両手に持ち、机上に等分に並べ(右図)、次に床に等分に並べさせる。	

出典：川田(1939a), pp. 200-201.

では初歩的な教育方法とされ、対象には白痴児も含まれていた。その他数概念、第八教具、文字教育（片仮名）のいずれもその対象に白痴児を含んでおり、川田が白痴児に対する教育内容について積極的に取り組んでいたことがわかる。

2) 「力の教育」の内容と方法

「力の教育」の主たる対象は、白痴（中度・軽度）・痴愚（重度）で、内容は「直観訓練」、「豆袋」、「担架」、「背負う」、「持つ」、「肩にかける」、「提げる」等があった。

豆袋の材質は、木綿または麻の生地で、大きさは21×15cm、重さ150g、赤、白2種類あり各6個で計12個であった（川田 [1929] 12）。豆袋の目的は、①「命令運動」と②歩き方の矯正のためであった。命令運動は、豆袋を無言でなげ、それを子どもに拾わせる方法であり、歩き方の矯正では、豆袋を子どもに投げ、音を立てて追いかけるという方法であった（川田 [1929] 13-15）。この方法によって白痴と教師との間に教授関係が形成されたと考え、白痴教育の出発点とされた（川田 [1929] 27-28）。

豆袋を使用した教育方法は、石井にも見られた。とりわけ川田の豆袋と近い方法は、「遊戯競技」と呼ばれる方法の一つで、それは「色鮮やかな」10個の豆袋を使用し、精神薄弱児に対して豆袋を投げ受け取らせ、それによって注意力の養成と眼と手との練習を目的とした（石井 [1907頃] 206-207）。

3) 心練

心練の目的は、精神発達および性格の治療にあり、その「根本的理念」は、自覚を引き出し、それを「延長」させることによって「自活動」へ発達させ、思考ならびに推理を可能にさせることであった（川田 [1941] 78）。また、心練は児童の「外的」を作用させ、それを「精神に及ぼ」し、精神と肉体との「相関関係的」に実施すると説明されており（川田 [1941] 78）、肉体と精神との作用によって心（内部）を矯正するとされ、川田独自の方法の一つであった。

この川田の心練は、藤倉学園設立以前から考

案されていたことは先行研究において明らかにされているが（高野 [2006]；[2008] ほか¹⁶⁾）、藤倉学園設立後の心練は、設立以前と比較すると、目的そのものに変化はなく治療教育の対象者全員に実施されていた¹⁷⁾。さらに実施されていた心練の項目は、「山箱（第三立体）」、「発音」、「円筒」、「立体斜線」（心練ノート1～4）、「注意心練」、「動作心練」、「筋肉延長練習」、「整理練習」であり（藤倉学園大正十五年一月編, 34-35）、藤倉学園設立以前に比べて心練の項目は増加していた。

(4) 日常生活訓練を中心とした「保護教育」の内容

「保護教育」の対象は創設期には白痴であったが、昭和戦中期には治療教育の効果が白痴に対しても期待出来るようになり、重度の白痴になる。だが、保護教育の内容は創設期と昭和戦中期で変わらず、日常生活の訓練が行われた。とくに排泄訓練は、藤倉学園の事業報告で発表され（藤倉学園昭和十四年度事業報告, pp.120-121）、白痴児の多くが抱える自力での排泄の困難さが、保母らによる訓練によって改善された。

しかし白痴児を対象としている以上、排泄等の日常生活訓練の効果や変化は目に見えて得られるものではない。それにも関わらず、川田は白痴児に対する日常生活訓練を、保護ではなく保護教育と呼称して、保護教育は教育的性格を持った教育的治療学の教育内容の一つに位置づけられていたと考えられる。

(5) 作業と職業の内容

「作業」の対象者は、年少の精神薄弱児で、行われた作業の種類は、創設期には農業、牧牛、養鶏、養兔、草履作り、庭造り、裁縫であったが、昭和戦中期になるとそれらに養豚、刺繍が加わる。

一方の「職業」は施設内保護の具体化とともに、昭和戦中期に設けられた構成内容である。対象は年長者で、彼らは、一人で農業に従事できない「教室の必要のない者」と、一人で農業に従事できる「職業教育の時期にある者」とに

分けられた。前者の「教室の必要のない者」は、職員等が付き添い施設内での作業や仕事（洗濯手伝いなど）に従事した。後者の「職業的教育期にある者」は、農場、園芸、果樹園での農作業、そして牧畜、養鶏、養豚に従事し、彼らは藤倉学園の重要な労働者であった。なぜなら、農業等の生産量については明らかではないが、藤倉学園では戦時下であったにもかかわらず、自給自足が可能であったからである。

5. むすび

本研究では、藤倉学園の創設期から昭和戦中期までの教育的治療学の体系を明らかにするため、創設期と昭和戦中期とで比べたが、それによって昭和戦中期までに教育的治療学の体系が2つの箇所において変化したことが明らかになった。一つは創設期から教育的治療学の構成内容であった治療教育に力の教育が加わったこと、もう一つは創設期には無かった職業が昭和戦中期に教育的治療学の体系に加えられたことである。この2つの変化は時期を同じくして昭和戦中期に起きてはいるが、それぞれの変化が起きた背景の相違も藤倉学園の処遇内容や方法の分析から明らかになった。

まず、治療教育に起きた変化は、川田の教育的治療学の実践に裏付けられたものであったといえる。彼は、彼が考案した治療教育の方法の効果を、藤倉学園での実践によって確かめることができたのである。すなわち、彼が藤倉学園で教育的治療学を実践しなければ、治療教育の内容が増加するという変化は起きなかったと考えられる。

一方、職業が教育的治療学に加わった背景には、藤倉学園の施設論の変化が背景にあった。創設期の藤倉学園では入所者の退所を想定し、退所できない入所者のために新たな施設を創設することを構想していた。だが、昭和戦中期になって新たな施設が創設することはなく、退所条件も厳しくなっていたのであった。

以上のような変化が昭和戦中期までの教育的治療学の体系には起きたのであるが、川田の教育的治療学の特徴は、藤倉学園における全ての

処遇内容を教育的治療学の構成内容としていたことにある。それは、滝乃川学園の教育内容と比較しても明らかであるが、藤倉学園の日中活動の集団編成の基準は、川田が考案した教育的治療学の対象論に従っており、日常生活に不可欠な精神薄弱児に対する保護の内容についても、教育効果を期待した教育的治療学の構成内容として位置づけていたのである。

最後に今後の課題であるが、本研究では直観訓練の教具とフレーベルの恩物との違いについては触れたものの、教育的治療学の理論や方法が、他の教育方法と類似しているのか、あるいは影響を受けているのかについては検討できなかった。他の教育方法や教具との比較は岡田(1989)のヒル積み木と川田の「立体教具」に関する研究が挙げられるが、精神薄弱児教育の教育方法として顕著なE. セガン (Seguin, Edward 1812-1880) の教育方法や理論など、他の同時代の教育方法や理論との比較が今後の課題といえる。

また、本研究では創設期から昭和戦中期までの教育的治療学の体系と内容について検討したが、昭和戦中期以後の教育的治療学の体系と内容に関する分析も今後の課題といえる。

註

- 1) その他の研究には、清水(1978b) pp.104-105、清水(1981) p.41がある。
- 2) 川田は藤倉学園設立以前に、小田原家庭学園(不良少年の保護施設)に明治42(1909)年9月～同43(1910)年10月まで勤務し、私立日本心育園(低能児教育機関)を自ら明治44(1911)9月に開園し、大正5(1916)年3月に閉園した。その後、アメリカ合衆国に大正5(1916)年4月～大正7(1918)年10月まで滞在し、アメリカの精神薄弱児教育や施設について学んだ。教育的治療学は、この間に心練を出発点にして考案され、体系化は藤倉学園設立後になる。
- 3) その他には、(清水1978a, 1978b, 1981)がある。
- 4) 藤倉学園では大正12(1923)年の春頃から入所者の増加に伴って、それまでの元村から馬の背への移転と馬の背での新園舎の建設が計画され、大正15(1926)年に新園舎が完成する。

- 5) 昭和13 (1938) 年清泉寮は、日本聖徒アンデレ同胞会 (BSA) の設立者P. ラッシュ (Rush, Paul 1897-1979) が、日米協会の青年活動およびBSA指導者訓練場として建設した。戦時中は立教大学が所有していたが、昭和19 (1944) 年藤倉学園に売却され、昭和20 (1945) 年再び立教大学が所有することとなる。
- 6) 疎開に際しては、配給生活になるがゆえに入所者の半数が家庭に帰されるものの、疎開先の清里村は寒冷地でなおかつ食料が入手困難であったため、疎開中に入所者の数名が死亡する (藤倉学園昭和貳拾参年度事業報告, p.204)。それゆえ終戦直後の昭和20 (1945) 年10月、大島へ帰島をするものの学園の建物、農場、牧場、山林は荒れ果て修復に数年を要することとなる (藤倉学園昭和貳拾参年度事業報告, pp.204-205)。
- 7) 滝乃川学園は、石井亮一によって創設された孤女教育施設、聖三一孤女学院 (明治24 [1891] 年創設) を経て、明治30 (1897) 年に名称を滝乃川学園に改称し、白痴教育施設として、白痴教育・保護を実践していた。
- 8) 本研究で使用する藤倉学園の事業報告書の中には復刻版や、発行年が不明のものもある。そのため本文中で事業報告書を引用する場合にはその表記を (事業報告書の年度、pp.) とする。
- 9) 東京少年審判所は、大正11 (1922) 年4月に公布された保護処分 (大正 12 [1923] 年1月施行、少年法第28条第2項) の、14歳未満の児童審判を実施するために創設される (財団法人日本少年保護協会東京支部 [1935] 184)。藤倉学園は、昭和3 (1928) ~10 (1935) 年まで少年法の保護団体として皇室からの下賜金を拝受している (財団法人日本少年保護協会東京支部 [1935] 102)。そのため少なくとも藤倉学園では、昭和3 (1928) 年頃から、東京少年審判所からの委託を受けていたといえる。
- 10) 日本心理学大会での発表は、川田 (1931a: 1933a: 1935b) がある。
- 11) 日本神経学会での発表は、川田 (1931b: 1932: 1934: 1935d) がある。
- 12) 昭和期になって川田が『児童研究』誌に発表した論文は、川田 (1933b) である。
- 13) 『教育心理研究』での発表には、川田 (1936a: 1937: 1938: 1939b: 1939c) がある。
- 14) 『応用心理研究』誌での発表には、川田 (1935c: 1936b) がある。
- 15) フレーベルの第四恩物のやり方は、①全体の紹介、②建築遊び、③模様遊び、④知恵遊び、⑤第三第四恩物の連合建築の順序で行われる (玉成高等保育学校幼児保育研究会 (編) [1974] 123-124)。目的は心身が発達し、要求が広汎・複雑になり、思考力・想像力が発達した幼児を満足させ、力を伸ばし、「自活動」を盛んにし、感情を美化することにあった (玉成高等保育学校幼児保育研究会 (編) [1974] 122-123)。
- 16) その他には、西谷 (1986)、清水 (1976、1978a、1978b、1981)、津曲 (1987、1988) がある。
- 17) 著者は、「心練」は藤倉学園の入所者全てに実施されていたと分析した (高野ら [2004] 171)。だが昭和16年の日課表ならびに昭和戦中期の入所者の教育内容を検討した結果、心練は「教室の時期にある者」のみに実施されていたことが明らかとなった。

文 献

- 玉成高等保育学校幼児保育研究会 (編) (1974) フレーベルの恩物の理論とその実際. フレーベル館. (本論文では12版を使用)
- 石井亮一 (1907頃) 治療教育技術. 石井亮一全集刊行会 (監), (1992) 増補石井亮一全集第1巻. 大空社. 171-270.
- 石井亮一 (1909) 白痴教育実験談. 内務省地方局 (編), 感化救済事業講演集 (下), 521-570.
- 石井亮一 (1923) 滝乃川学園について. 石井亮一全集刊行会 (監), (1992) 増補石井亮一全集第1巻. 大空社. 289-298.
- 石井亮一 (1933) 一般児童・不良児、精神薄弱児に関する統計調査. 石井亮一全集刊行会 (監), (1992) 増補石井亮一全集第2巻. 大空社. 263-454.
- 石井亮一 (1940) 白痴教育発達史. 石井亮一全集刊行会 (監), (1992) 増補石井亮一全集第1巻. 大空社. 277-288.
- 石井亮一 (1926-1933) 教育断片. 石井亮一全集刊行会 (監), (1992) 増補石井亮一全集第3巻. 大空社. 271-314.
- 石井亮一・石井筆子・城戸幡太郎・奥田三郎 (1910-1925) 精神薄弱児に就いて. 石井亮一全集刊行会 (監), (1992) 増補石井亮一全集第2巻. 大空社. 147-181.

川田貞治郎の「教育的治療学」の体系と内容の変化

- 川田貞治郎 (1926) 精神薄弱児の治療教育 (一). 教育論叢, 15(3), 51-70.
- 川田貞治郎 (1929) 精神薄弱児ノ諸問題. 教育的治療学研究, 1(1), 1-33.
- 川田貞治郎 (1931a) 白痴の本質に就いて. 心理学論文集, Ⅲ, 423-427.
- 川田貞治郎 (1931b) 痴愚ノ教育的治療ノ一考察. 神経学雑誌, 33(3), 3-4.
- 川田貞治郎 (1932) 教育的数ノ病理ノ実験的研究. 神経学雑誌, 34(6), 6-8.
- 川田貞治郎 (1933a) 白痴の言語障害の病理に就て. 心理学論文集, 4, 225-228.
- 川田貞治郎 (1933b) 臨床的白痴児の新分類の研究. 児童研究, 37(1), 23-25.
- 川田貞治郎 (1934) 治療教育的教具ノ研究. 神経学雑誌, 37, 340-341.
- 川田貞治郎 (1935a) 治療教授法と基礎的原理. 精神衛生, 9, 25-35.
- 川田貞治郎 (1935b) 手掌の診断的価値. 心理学論文集, 5, 130-134.
- 川田貞治郎 (1935c) 新に精神薄弱児の診断と分類と治療. 応用心理学, 2(3), 15.
- 川田貞治郎 (1935d) 治療教授教具の研究 (第二報). 神経学雑誌, 38(9), 81-82.
- 川田貞治郎 (1936a) 見出されざる応用心理学としての考案. 教育心理研究, 11, 135-137.
- 川田貞治郎 (1936b) 白痴児の数発達理論的研究. 応用心理研究, 4(2), 50-54.
- 川田貞治郎 (1937) Die mortorische Schulungに顕はれたる初心の心理的意義. 教育心理研究, 12, 247-251.
- 川田貞治郎 (1938) 戦争心理学の一考察. 教育心理研究, 13, 273-276.
- 川田貞治郎 (1939a) 教育治療学ノ基礎的方法特ニ直観訓練及ビ数訓練ニ就イテ. 精神神経学雑誌, 42, 197-209.
- 川田貞治郎 (1939b) 「カズ」の欠陥症と誤算の病理. 教育心理研究, 14, 204-209.
- 川田貞治郎 (1939c) 夜尿症児の教養. 教育心理研究, 14, 662-666.
- 川田貞治郎 (1939d) 教育的治療. 児童保護, 9(7), 53-59.
- 川田貞治郎 (1941) 心練学の心理学的意義. 心理学研究, 16, 78-79.
- 川田貞治郎 (1958) 精神薄弱児の教育的治療法に
関する一試論—心練を中心として—. 精神神経学雑誌, 60(5), 19-27.
- 菊池義昭 (1977) 川田貞治郎の「教育的治療学」に関する一考察. 愛護, 24(1), 43-52.
- 西本順次郎・松原隆三 (1982) モンテッソーリ教具による感覚訓練の実践. 学習研究社. (初版は1975年、本研究では第12版を使用)
- 西谷三四郎 (1981) 川田貞治郎と教育的治療学. 文教大学教育学部紀要, 15, 58-66.
- 西谷三四郎 (1986) 障害児治療教育の源流. 社会法人全国心身障害児福祉財団.
- 岡田英己子 (1989) 治療教育における教具についての歴史的考察 (1). 障害者問題史研究紀要, 32, 39-50.
- セガン, E., 末川博監訳 (1973) 障害児の治療と教育—精神薄弱とその生理的治療. ミネルヴァ書房.
- Seguin, E. (1866) Idiocy: and treatment by the physiological Method.
- 心練ノート 1～4. (藤倉学園本部所蔵)
- 清水寛 (1976) 川田貞治郎関係文献の目録と解説. 精神薄弱者施設史研究, 創刊号, 144-157.
- 清水寛 (1978a) 川田貞治郎の「教育的治療」の思想と方法—「教育的治療法」概念の形成過程を中心に—. 障害者問題研究, 1(13), 24-40.
- 清水寛 (1978b) 川田貞治郎の「教育的治療」の思想—序説—. 西谷三四郎編, 精神薄弱教育の基礎理論と実践. 90-106.
- 清水寛 (1981) 発達保障の形成. 青木書店. 40-83.
- 高野聡子 (2005) 川田貞治郎の「教育的治療学」におけるビネ知能検査の導入と役割—大正期のアメリカ滞在から昭和前期の藤倉学園創設を中心として—. 心身障害学研究, 29, 99-108.
- 高野聡子 (2006) 川田貞治郎の「心練学」の体系とその到達点—明治末期の小田原家庭学園と水戸友会を中心として—. 心身障害学研究, 30, 81-91.
- 高野聡子 (2008) 川田貞治郎の日本心育園における低能児教育としての心練の実践. 障害科学研究, 32, 59-71.
- 高野聡子 (2009) 藤倉学園創設期における川田貞治郎の「教育的治療学」の内容とその背景. 社会事業史研究, 37, 93-110.
- 高野聡子・松矢勝宏・中村満紀男 (2004) 川田貞治郎の「心練」の実態に関する研究—戦前の実践事例の検討を通して—. 心身障害学研究, 28,

- 165-174.
- 東京府社会事業協会（1923）管内児童保護事業概観. 近現代資料刊行会（編）,（1995）東京市・府社会調査報告書 3 大正12年（2）, 295-328.
- 滝乃川学園（1910）学園のまとい. 滝乃川学園. 滝乃川学園（編）,（1986）石井亮一と滝乃川学園石井亮一没後50周年記念復刻版. 113-171.
- The Training School. For the Year of 1917, 29th AR of. 津曲裕次（1987）教育的治療学史の研究－在米時代の川田貞治郎について－. 日本教育学会大会発表要旨集録, 46, 64.
- 津曲裕次（1988）日本心育園史研究序説. 柳川光章教授退官記念会（編）障害児学への道: 柳川光章教授退官記念論文集. 47-60.
- 津曲裕次・金子喜美子（1974）滝乃川学園の歴史－「精神薄弱者施設」史研究序説－. 社会事業史研究, 15-50.
- 財団法人藤倉学園編（1920）大正九年度年報第一卷. 財団法人藤倉学園.
- 財団法人藤倉学園編（1922）大正十年度年報第二卷. 財団法人藤倉学園.
- 財団法人藤倉学園編（1941）財団法人藤倉学園. 知的・身体障害者問題資料集成（戦前編）第15巻. 不二出版. 129-148.（昭和16年度の報告）
- 財団法人藤倉学園編（不明）昭和十二年度事業報告財団法人藤倉学園. 川田仁子（編）,（1989）教育的治療学全集 V. 文化出版局, 9-64.
- 財団法人藤倉学園編（不明）昭和十三年度事業報告財団法人藤倉学園. 川田仁子（編）,（1989）教育的治療学全集 V. 文化出版局, 65-108.
- 財団法人藤倉学園編（不明）昭和十四年度事業報告財団法人藤倉学園. 川田仁子（編）,（1989）教育的治療学全集 V. 文化出版局, 109-154.
- 財団法人藤倉学園編（不明）昭和十五年度事業報告財団法人藤倉学園. 川田仁子（編）,（1989）教育的治療学全集 V. 文化出版局, 155-200.
- 財団法人藤倉学園編（不明）昭和貳拾参年度事業報告. 川田仁子（編）,（1989）教育的治療学全集 V. 文化出版局, 201-220.
- 財団法人藤倉学園編（不明）大正十三年度年報第五卷. 財団法人藤倉学園.
- 財団法人藤倉学園編（不明）大正十四年度第六卷/一五年度年報第七卷. 財団法人藤倉学園.
- 財団法人藤倉学園編（不明）大正十五年一月編. 財団法人藤倉学園.
- 財団法人藤倉学園編（不明）大正十一年度/十二年度年報. 川田仁子（編）,（1989）教育的治療学全集 IV. 文化出版局, 152-263.
- 財団法人日本少年保護協会東京支部（1935）東京少年審判所十年史. 財団法人日本少年保護協会東京支部.
- 財団法人滝乃川学園編（1935）滝乃川学園その日その日昭和10年度. 滝乃川学園（編）,（1986）石井亮一と滝乃川学園石井亮一没後50周年記念復刻版. 343-381.

—— 2010.9.1 受稿、2011.3.23 受理 ——

A Study on the system of Teijiro Kawada's "Educational Therapy", and change of the contents, 1919-1944

Satoko TAKANO

Teijiro Kawada (1879-1959) was devising the "Educational Therapy" which is the education for the feeble-minded children, and the method of protection, and is also theory, before the Fujikura Home and School for the feeble-minded children which was an institution for the feeble-minded children was founded in 1919. Time was divided into the time when the institution was founded, and the term of Showa during the war (1938-1944), and this research considered change of the system of the "Educational Therapy" of him, and change of the contents of composition. As a result, it became clear that the contents of composition of "Educational Therapy" were changing in response to the following influences. The influence is change of the actual condition of the children of institution. Furthermore, it also became clear in the practice candidate of "Educational Therapy" that the classification of the grade of the feeble-minded children was affected by the influence of change of the actual condition of those who have entered the institution. All the treatments to the children currently given having become clear in this research at the institution serve as the contents of composition of the "Educational Therapy", and the education effect was expected from them.

Key words: Teijiro Kawada, Educational Therapy, the Fujikura Home and School for the feeble-minded children, the institution for the feeble-minded children